

21世紀の教育を創るために

森 敏昭

6回にわたる筆者の連載も、いよいよ今回が最終回である。そこで今回は、21世紀の教育のあるべき姿を展望し、それと関連づけて、これまで述べてきた筆者の論点を整理しておくことにする。

1. 21世紀の教育が目ざすもの

21世紀の扉が開かれた今、我が国では教育の抜本的な改革がなされようとしている。21世紀には、地球環境問題、エネルギー・食糧問題など人類の生存基盤を脅かす諸問題がより一層深刻化するとともに、国際化、情報化の流れもさらに加速するであろう。おそらく21世紀は、20世紀以上に激動の世紀になるに違いない。したがって、我が国が活力ある国家として21世紀にさらなる発展を遂げるためには、国家という社会システムの基盤である教育の改革が重要であることは言うまでもない。では、20世紀の教育とは何だったのだろうか。そして、21世紀の教育はどこへ向かうべきなのだろうか。

明治維新以来、我が国では欧米の先進諸国に追いつくことを目標にして、欧米の進んだ科学的知識を広く国民に伝達するための、「知識伝達の教育」がなされてきた。要するに、明治維新以来の我が国の学校は、我が国が近代化を成し遂げるための「知識伝達装置」の役割を果たしてきたのである。もちろんそのことは、決して根底から否定されるべきではない。なぜなら、欧米諸国が2世紀以上かけ

て達成した近代化を、わずか1世紀の間に我が国が達成することができたのは、この「知識伝達装置」が実に効率的に機能したからにほかならないからである。しかし我が国は、すでに近代化を成し遂げた。したがって、「知識伝達装置」としての学校は、その歴史的使命を終えたと言わざるをえない。では、21世紀の学校に課せられた新たな使命は何なのだろうか。それはおそらく「知識創造の場」としての役割を果たすことであろう。なぜなら、文明・文化は本来、受け継ぎ受け継がれていくものであり、しかも、受け継いだものに何らかの「創造」が付加されなければ、受け継がれることなく朽ち去る運命にあるからである。したがって、何千年にもわたって受け継がれてきた我が国の文明・文化が今後も受け継がれていくためには、常に新たな文明・文化を創り出すための「知識創造の学び」が継続されるべきなのである。

2. 「知識創造の学び」の成立条件

筆者はこれまで、学力低下に歯止めをかけるためには、学校を「真の学び」がなされる場所として蘇(よみがえ)らせることが重要であり、その「真の学び」は赤・青・黄の3色の糸で編み上げるべきであると繰り返し主張してきた。

「知識創造の学び」の成立条件も、この「真の学び」の成立条件と全く同じであるが、そのことの意味をわかりやすく説明するために、

前回「減点主義の評価」の問題点を説明する際に用いた「色の混色」の例えを援用することにしよう。しかし、その前に知識創造のシンボル色を特定しておく必要がある。

知識創造のシンボル色は「緑」こそがふさわしい。なぜなら、光合成によって無機物から有機物を創り出す植物の創造的な営みと、本来は創造的であるべき人間の学びの驚くべき類似性に着目するならば、知識創造のシンボル色は葉緑体の「緑」以外には考えられないからである。

さて、その知識創造の「緑」は、「黄」と「青」の混色によって生み出される。このことは、次の2つのことを象徴的に表している。

第1に、「知識創造の学び」には知性化の「青」が不可欠だということである。そのことは、この連載の3回目に紹介したハーブ・ジョンソン先生の授業実践に端的に示されている。ジョンソン先生の授業は、あらかじめ決められた指導案からではなく、生徒たちの疑問から出発し、それをクラスでの話し合いや協同の調べ学習へと発展させる。そして最後に、調べ学習で学んだ具体的体験を抽象化・一般化された教科学習と繋(つな)げる。つまり、この最終段階で知性化の「青」が加えられるのである。ところが日本の多くの総合学習では、この最終段階が不十分であることが多い。そのため、具体的体験の意味づけや価値づけが十分になされないまま、いわゆる「這(は)い回る体験学習」で終わってしまう。学びの3原色のうちの「青」が欠けると、決して知識創造の「緑」は生まれない。赤と黄の混色によって生み出される「橙」は、素朴理論や誤概念や偏見や迷信がはびこる「衆愚の学び」のシンボル色なのである。

第2に、知識創造のシンボル色が「緑」であることは、「知識創造の学び」には社会化の「黄」が不可欠であることを意味している。つまり、学びの3原色のうちの「黄」が欠けた場合にも、やはり知識創造の「緑」は生まれ

ない。赤と青の混色によって生み出されるのは「紫」であり、「紫」は「独善(ドグマ)の学び」のシンボル色なのである。そのことは、「紫」に対応する波長の光は自然界には存在しないことに象徴的に示されている。すなわち、人間の眼で色を知覚することができるのは、波長が380~780nmまで(青紫から赤まで)の範囲の光であり、この範囲よりも外側の波長の光に対応する色はない。要するに「紫」は、赤と青の色光が混合した時に人間の脳の視覚系が作り出す「幻想の色」なのである。この意味においても、「紫」は「独善(ドグマ)」のシンボル色とするのがふさわしい。

ところで、知識創造の「緑」を生み出すのに不可欠な青と黄に赤が加わると、「緑」ではなく白~黒の無彩色が生じる。これはいったい何を意味しているのであろうか。実はそのことにこそ、「知識創造の学び」の本質が象徴的に示されている。

日本古来の芸能や武道の世界では、熟達化の過程は「守破離」の3段階をたどるとされている。すなわち、特定の流派の流儀を学び、それを忠実に「守る」のが熟達化の第1段階である。しかし、やがて流儀を「守る」だけでは飽き足らなくなる。そして、独自の流派を興したいという欲求が生じ、次の「破」の段階へと進む。しかし多くの人は、この「破」の段階で我流に陥り、しばしば「破門」の憂き目を見ることになる。そうならないためには、次の「離」の段階へ進む必要があるのである。この「離」とは、要するに我流(我執)を離れ、自己を対象化することを意味している。つまり、閉ざされた個性化の「Iの世界(赤)」を離れ、知性化の「meの世界(青)」をもつのである。そうすると社会化の「Weの世界(黄)」が開け、人は他流を学ぶことができるようになる。かくして優れた弟子は師匠を乗り越え、次世代にまで受け継がれる新流派を創造することができるのである。

(もり・としあき=広島大学大学院教授)